



知多市の随応寺（金沢）にあった熊野観心十界図と、八社神社（同）の那智参詣曼荼羅の掛け軸二幅が、市の文化財に指定された。市によると、江戸時代前期に熊野比丘尼という尼僧が、知多で布教活動をしていたことを物語る資料という。一つの史実を示す作品が二つも残るのは全国でも十力所ほどで、珍しいケースという。

熊野観心十界図は縦一・四尺、横一・二尺で、生と死をテーマに、人の一生や仏、菩薩、地獄の様子などが描かれている。那智参詣曼荼羅は、縦一・四尺、横一・六尺で、熊野信仰の聖地である那智山に、参拝者が巡礼する様子を表している。熊野観心十界図は、現代でも信者らの念仏のときに、掛けられて使われている。

熊野比丘尼は、戦国時代から江戸時代にかけて、熊野本宮大社（和歌山県田辺市）などの熊野三山の運営資金を集めるために、諸国を巡って掛け軸を

知多・北柏谷地区の掛け軸2幅



市文化財に指定された熊野観心十界図と那智参詣曼荼羅。知多市金沢で収蔵品展で飾られているこのほりや段飾り。知多市歴史民俗博物館で

見せて絵解きをしながら、勧進活動をしていたとされる。文化財に指定された掛け軸は、熊野比丘尼が知多半島にも訪れていたことを示す貴重な資料で、折られた跡が確認でき、熊野比丘

尼が折りたたんで運んでいたと考えられるという。二幅があった知多市の北柏谷地区ではこれまで、二幅の関連や価値がはっきり分からずに、別々の物として長く

保管してきた。関心を持った住民らが調査を始め、愛知教育大教育学部の鷹巣純教授（仏教美術史）に調査を依頼するなどして、貴重な資料ということが判明した。

調査活動に主に取り組んできた地元の市文化財保護委員の久野与吉さん（左）＝同市金沢＝は「江戸時代の貴重な物がこんな田舎にあったと知り、住民として誇りに思う。引き継いで子どもたちに見せ、地域の宝物にしていきたい」と話している。

文化財の指定を記念し、市歴史民俗博物館（緑町）で二十日に始まった収蔵品展「端午の節句 五月人形展」（五月十二日まで）で、掛け軸二幅を特別公開している。展示では大正や昭和時代の段飾り、座敷飾り、武者人形、土人形、こいのぼりなど二十二点も飾られている。入場無料。五月三、五日は甲冑の試着体験もある。五月七日は休館。（福本英司）

宝モノ語りは今回で終了します。

住民ら調査し文化財に